

特集への緒言：
「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」

Introduction to Special Issue:
American Society in the Dynamics of
Integration and Disintegration

愛甲 雄一*
Yuichi Aiko

成蹊大学アジア太平洋研究センター（CAPS）では近年、あるひとつのテーマを議題にした講演会を年に複数回開催する、ということが毎年の恒例行事になっている。2012年度の場合には、4年に1度行なわれるアメリカ大統領選が同年秋に予定されていたことも考慮して、現代アメリカ社会の理解を主な目的に置いた企画を催すことにした。「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」と題された連続講演会が、それである。今回の特集に収録されている4本の論文はいずれも本企画を行なったことに端を発したものであり、計5回開催された講演会に講師としてお招きした方々のうち、3名の先生方からご寄稿を賜っている。残りの1本は、本企画の立案・運営を担当した愛甲の拙稿である。

21世紀に入ってからのアメリカは、2001年の9・11同時多発テロ事件・2008年のリーマン・ショックに端を発する金融危機などといった、社会全体を揺さぶる大事件に幾度か見舞われてきた。治安、経済、文化、宗教、外交などをめぐり国論を二分する問題にも繰り返し直面し、最近でも、いわゆる「オバマ・ケア」をめぐる議会の対立が連邦政府機関の一時閉鎖につながるなど、国内状況も一向に安定する様子を見せていない。しかしながら、そのようなアメリカが修復不可能なまでの分断に陥っているかと言えば、必ずしもそうは言えなさそうである。移民の増加などにより社会の多様化は不可逆的に進行しているにもかかわらず、それでも、「ひとつの社会」としてのまとまりはさほど揺らいではいない。これはいったいどうしたことなのだろうか。そのような、よく考えてみれば不思議とも言わざるを得ないアメリカ社会の様相を、「分裂」と「統合」をキーワードに理解を試みようとしたのが、先の連続講演会のねらいであった。

第1回の講演会（2012年6月28日）では、日本におけるアメリカ史研究の大家と言ってもよい東京女子大学教授の油井大三郎先生をお招きして、「アメリカ史における分裂と統合—南北戦争、民族集団・人種対立、ティーパーティ運動」と題された講演を行なっていただいた。それは、「分裂」と「統合」という二つの視点から建国期以降のアメリカ史を論じてみせるという、本連続企画の巻頭を飾るにふさわしい油井先生ならではの壮大なお話であった、と言ってよいだろう。本講演の内容はほぼそのままの形で本稿の直後に収録されているので、本特集の真のイン

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員、Chief Research Fellow, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
E-mail: aikoyuichi@ejs.seikei.ac.jp

トロダクションという意味でも、ぜひこの油井論文には目を通していただきたい。過去から現在に至るまでの間、アメリカ社会がどのような亀裂を抱えてきたのか、またときにそれをどう修復し社会の統合を維持してきたのか、その概要をきっと理解できるはずである。

第2回目の講演会（2012年7月20日）では、「複数のアメリカ、見えないアメリカ——イメージ、人種主義、バラク・オバマ」というタイトルのお話を、北海道大学大学院准教授の村田勝幸先生に行なっていただいた。多様な人種・エスニック集団の存在がアメリカ社会を分断させる原因になっていることは周知の通りであるが、村田先生のご講演は、初の「黒人」大統領であるオバマの演説を分析しながら、人種を語りつつその違いを超えようとする彼の「ひとつのアメリカ」に対する志向性を浮き彫りにするものであった、と言える。先生からは、本特集2本目の論文として、その講演よりもさらに分析の内容を充実させた「バラク・オバマの『より完全な連邦』演説にみる人種ビジョン——『ポスト人種社会』論への批判的介入のために」という論文をご寄稿いただいた。

3本目の論文は、現在は成蹊大学アジア太平洋研究センターの客員研究員でもある野崎与志子先生（ニューヨーク州立大学バッファロー校名誉准教授）からご寄稿いただいた「ジェンダー・ダイナミクスとアメリカ社会の変化——女性の労働参加とグラス・シーリング」である。野崎先生には、2013年1月28日開催の第5回講演会で、「ジェンダー・ダイナミクスとアメリカ社会——政治と経済と高等教育」と題されたお話を行なっていただいている。本論文は、そこでの講演内容をベースにしながら、とくにアメリカ社会における女性労働の状況について論じていただいたもの、とすることができよう。アメリカでは日本とは比較にならないほどに女性の社会進出が著しいが、それでもジェンダーに起因する壁は、アメリカ女性にとってもけっして低くないことが、その野崎論文からは明らかになっている。

本特集の最後に収録した愛甲の論文は、アメリカ社会で頻繁に引用や言及が行なわれているアレクシ・ド・トクヴィルの名著『アメリカのデモクラシー』（1835・40年）の読まれ方から、この社会における「統合」と「分裂」の様相を示そうとしたものである。「保守対リベラル」のような激しい対立が存在しているにもかかわらず、アメリカ人の間では、その理想とするアメリカ社会像については、彼・彼女の政治的信条に関係なく案外同じような見方がされている。この点を明らかにしようとしたのが本論文のねらいであって、それは、上述した3本の論文のように講演をもとにしたものではないのであるが、しかし本企画を進めていくなかでアメリカ社会について多くを学び得た愛甲からの「ひとつの成果物」として受け取っていただければ、幸いである。

最後にこの場を借りて、本特集にご寄稿くださった3人の先生方にはもちろんのこと、連続講演会の企画・運営その他にさまざまな形で関わって下さったすべての方々、そして、各講演会にフロアから参加して下さった聴衆の方々にも、改めて厚く御礼を申し上げます。とくに、本学文学部の准教授でアジア太平洋研究センターの所員でもある中野由美子先生には、企画の内容から講演者の推薦などに至るまで、年度を通じてたいへんお世話になった。今回の『アジア太平洋研究』において本特集を組み得たのも、先生のご助力に与っている部分が少なくない。ここに末筆ながら、先生に対する感謝の気持ちを明記しておきたく思う次第である。